

道徳教材「車いすの少年」に対する大学生の意識について

Attitudes towards "Kurumaisu no Syonen" for students of the university

今井まどか*・有川宏幸

1. 問題と目的

小学校では2018年度、中学校では2019年度から「特別の教科」として「道徳」が教科になる。教科化にあたり、道徳教科書のはじめての検定結果が2017年3月に発表された。道徳の教科化のきっかけとなった、「いじめ」の問題についてはすべての教科書がとり扱っていた。また学習指導要領の内容である「国や郷土を愛する」については、「パン屋」を「和菓子屋」に変えたことなどが話題となった。

ところで、道徳が教科になる以前の現在において、道徳教育には教材として副読本が使用されている。文部科学省(2012)は、すべての公立の小学校及び中学校等を対象に道徳教育実施状況を調査している。それによると小学校・中学校ともに90%以上の学校が道徳の時間に道徳副読本を使用していると回答していた。こうした中、障害理解教育や福祉教育の一環として、道徳副読本の中で障害に関する事項がしばしば取り扱われている。

富樫・水野・石上・西館・徳田(2004)は、小学校、中学校で使用されている道徳副読本の中で障害に関する事項がどの程度掲載されているかについて分析を行ったところ、小学道徳、中学道徳ともに出版社によって障害に関する文章表現を掲載する割合に大きな差があることを明らかにしている。また、水野・富樫・石上・西館・徳田(2004)は小学校、中学校で使用されている道徳副読本に、障害に関する内容がどのように掲載されているか分析を行っている。結果、小学道徳では「障害の原因」や「障害の特性」等の「障害の特徴」について書かれている資料が多いことを明らかにしている。また、障害者と突然出

くわして援助をしたことの話が載せられていることも多く、富樫ら(2004)は、『障害者の援助をすすんでできる心情を育てたいとする意図が強く感じられる。しかし、間違った方法で障害者とかかわっても、援助にならないどころか、かえって子どもも障害者も危険な目にあうことがある。つまり、「困っている人に手助けする」という心情を育てるだけでなく、実際に適切な援助ができるように援助の方法や、子どものできる範囲の援助にはどのようなことがあるのかを具体的に教えることが必要である。』と指摘している。その一方で、障害者は「常に援助が必要な存在」というわけではないことも併せて伝えていく必要があるとの指摘もある(水野, 2005)。

また、中学道徳では「障害の原因」や「障害(者)観」、「偏見・差別」について書かれている資料が多いことが明らかになっている。中でも「障害(者)観」については、「障害は個性である」、「障害者は常に援助されるべき存在ではない」とする論調がほとんどであった。このような結果を踏まえ、水野ら(2004)は『障害者が普通に日常生活を送っているだけで、「障害があるのに立派に生きている」などと美談化したり、障害の大変さを過度に協調したりすることによって、生徒たちに「障害者は常に苦勞に耐えながらけなげに生きている人である」と認識させてしまうおそれがある。そのため、教師がこのような資料を使用する際には子どもたちにそのようなステレオタイプの見方を持たせないように配慮しなければならない。』と述べている。

身体に障害があり車いすで生活を送る少年を題材にした教材に「車いすの少年」と言う読み物がある。この教材は、小学校、中学校で「真の思いやり」を学ぶ教材として使用されている。この教材のテーマは「街の中で困っている障害者に手を貸すべきかど

2017.6.23 受理

*新潟県立月ヶ岡特別支援学校

うか」という点にあり、「障害者が自分で生きていくことができるように見守ることが大切だ」という視点を子どもに伝えるものとして扱われている。あらすじは以下の通りである。

作者（日本人）がイギリスを旅していた時の話である。車いすの少年が往來の激しい街の中を移動していた際に、右車輪を側溝に落としてしまい、動けなくなってしまう。作者はすぐにこの少年を助けようとしたが、周りにいた人に制止され、少年が自力でこの状況から抜け出せるように見守るべきであると言われる。作者は、初め納得できなかったものの、言われるままに周りの人たちと一緒に少年を見守り声援を送ることにする。少年は長い間をかけて奮闘した結果、自力で元の状態に戻り、「サンキュー」と言って立ち去る。

徳田・水野（2007）は、複数の道徳副読本に掲載されている「車いすの少年」という読み物教材に対して、車いす使用者がどのように評価するかについて、車いす使用者とその家族に対して質問紙を用いて調査している。結果、大多数がこの教材を不適切であると回答していたことを明らかにしている。その理由として「これを読んだ子どもたちは、困っている人たちに手を差し伸べなくてもよいと考えるようになるのではないか。単なる傍観者を育てることになる（50代・使用者）。」「障害者の中には問題に直面した時に周りに助けを求めることができない人がいる。『頼まれないから助けない』ということではない（10代・使用者）。」「子どもに読ませたくない話である。見守る方がいいというのは、さまざまな経験を積んで、その人がどの程度のことのできるのかを感じられるようになってからだと思う（40代・家族）。」「声をかけて、少年の気持ち（助けてほしいのか、ほっておいてほしいのか）を確認すべきだ（40代・家族）。」などがあげられている。

この結果を受け、徳田ら（2007）は、障害者を見守ることの重要性を伝える教材としてこの教材は極めて不適切と指摘している。特に、この場面は事故の危険性が高く、早急な援助が必要であると述べている。また、「援助」か「見守り」かの二者択一ではなく、まず当事者にニーズを尋ねることが基本であると結論付けている。

水野（2008）は、教職を目指す大学生に対し、この教材をどのように評価するのかを調査している。その結果、調査対象者（49名）のうち40名（82%）

が「この場面では障害者を見守ることが重要であり、周りの人々の態度は適切である」と回答していたことを明らかにしている。水野（2008）は障害者が援助を必要としている状況であるのか判断するための知識がなかったことがこの回答傾向の原因であると考察している。その上で、まずは子どもたちの障害理解を歪めかねない資料を適正化すること、それとともに教員を目指す学生が障害理解を適切に認識し、適正な障害観を身に付けられるように、養成の段階での障害理解教育が必要不可欠であると述べている。

水野（2008）の指摘はもっともであると思われるが、そもそも道徳教育とは多様な考え方があることを基本とすべきところである。誤った援助を増長するようなことは避けるべきではあるが、教材により多様な考え方、自己の意識、他者の考えに気づくことも重要である。道徳教材「車いすの少年」にどのような意識を持っているのかを明らかにし、そこから教材を通じた適切な援助のあり方を議論することもまた必要な手続きであると思われる。

そこで本研究では大学生を対象に「車いすの少年」を読んだ際に、どのような意識につながるかわかりやすく、「車いすの少年」の道徳教材としてのあり方について検討することを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象

調査対象者は、A大学の学生のうち、Bキャンパスに通う学生。

2. 調査期間

調査期間は、予備調査が201X年4月25日から28日の計4日間。その後、本調査を201X年7月27日から29日の計3日間に実施した。

3. 予備調査と調査用紙の作成

質問紙を作成するにあたり、まずA大学Bキャンパスの学生に予備調査を行った。調査内容は道徳教育に関するアンケートと題して、道徳教材「車いすの少年」を読んでもらった後に「この文章の筆者の行動についてどのように思ったか」「身近なところで、車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったらどのように行動するか」「あなたが車いす使用者で、車椅子の車輪が溝にはまってしまったらどのように行動するか」の3つの質問について自由記述式で回答を求めた。配布数は40部、回収率は

82.5%（40名中33名分を回収）であった。

自由記述式の回答を以下の手順により整理した。

まずA大学の教育学部で特別支援教育について学んでいる学生4名が、収集された自由記述についてKJ法を用いて項目の整理、統合を行った。KJ法を実施した結果、「この文章の筆者の行動についてどのように思ったか」に対しての回答は1)困っている人を助けるのは良いと考える、2)助けることも見守ることも正しい、3)自分でも筆者と同じように行動する、3)車いす使用者の意思を確認するべきである、4)見守ることと助けることのどちらがよいのかは場合による、5)見守る行動がよい、などに分類された。

また「身近なところで、車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったらどのように行動するか」に対しての回答は1)迷わず助ける、2)声を掛けて必要であれば助ける、3)自分以外誰もいなければ助ける、4)危険があれば助ける、5)悩む、6)何もしない、などに分類された。

さらに「あなたが車いす使用者で、車椅子の車輪が溝にはまってしまったらどのように行動するか」に対しての回答は1)自力で何とかする、2)助けが来れば受け入れる、3)自分で解決しようと努力し無理ならば助けを求め、4)危険が迫っていたり他人の邪魔になっていたりするようなら助けを求め、5)声に出して助けを求め、などに分類された。

この結果を基に本調査で使用する調査用紙を作成した。調査用紙を作成するにあたり、A大学教育学部の学生3名と協議し各項目を設定した。その後、障害児心理学を専門とする大学教員と協議し、各質問項目の妥当性と回答者に与える心理的影響を考慮し最終的な質問項目を設定した。なお調査用紙は、無記名式の5件法による調査用紙の形式を採用した。

質問項目の内容は、1)「この文章の始めて、車いすの車輪を側溝に落としてしまった少年をすぐに助けようとした筆者の行動は正しい」、2)「もしあなたが、身近なところで車いすの車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら、すぐに助ける」、3)「この文章の筆者は、手助けする前に車いすの少年の意思を確認するべきだった」、4)「もしあなたが、身近なところで車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら、手助けする前に車いす使用者が他者の迷惑になっているかどうか判断する。」、5)「この文章で、最終的に車いすの少年を見守った筆者の行動は正しくない」、6)「もしあ

なたが車いす使用者で、車いすの車輪が溝にはまってしまったら、周囲の人に見て見ぬふりはしてほしくない」、7)「もしあなたが、身近なところで車いすの車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら、手助けする前に車いす使用者の意思を確認する」、8)「この文章の筆者は、車いすの少年が車いすの車輪を側溝に落としてしまい他者の迷惑になっているかを手助けする前に判断するべきだった」、9)「もしあなたがこの文章の登場人物であったら、筆者と同じように車いすの少年をすぐに助ける」、10)「もしあなたが、身近なところで車いすの車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら、人任せにせず自分が助ける」、11)「もしあなたが車いす使用者で、車いすの車輪が溝にはまってしまったら、他者の迷惑になっているかどうか気になる」、12)「もしあなたが車いす使用者で、車いすの車輪が溝にはまってしまったら、手助けする前に危険な状況かどうか判断してほしい」、13)「もしあなたが、身近なところで車いすの車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら、見て見ぬふりはしない」、14)「もしあなたが車いす使用者で、車いすの車輪が溝にはまってしまったら、手助けする前に意思を確認してほしい」、15)「もしあなたが、身近なところで車いすの車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら、手助けする前に車いす使用者が危険な状況にあるか判断する」、16)「もしあなたが車いす使用者で、車いすの車輪が溝にはまってしまったら、周囲の人にすぐ助けてほしい」である。

また、この調査用紙には道徳教材「車いすの少年」の本文を添付し、読んだ後に質問項目に回答するよう依頼した。

4. 調査方法

調査方法は、無記名式質問紙調査法を用いた。調査用紙は、調査期間にA大学の食堂前、講義終了時に配布し、回答後に入出口で用紙を回収する方法をとった。なお回答者が重複しないような配慮を行った。

5. 分析方法

(1)集計

調査用紙の配布数は全部で200部、回収率は92%（200名中184名分を回収）であった。回答に未回答箇所など不備のあった5名を除き、179名の回答について集計を行った。16の質問項目に対する回答

の数値の平均、標準偏差、天井値、床値を求め、回答の傾向を把握した。

(2)分析

16の質問項目の集計の結果、天井値と床値を除いた質問項目について、どのような因子構造になるかを検討するため、因子分析を行った。因子数の決定は、固有値1以上の基準を設け、さらに因子の解釈の可能性を考慮し、kaiserの正規化を伴うプロマックス法による回転を行った。ここで因子パターンが0.35に満たなかった項目を分析から取り除き、最終的に残った11項目について再度プロマックス法による回転を行ったところ、最終的に4つの因子が抽出された。

Ⅲ. 結果

因子分析の結果は、Table 1に示した。また因子間相関はTable 2に示した。

第1因子は、質問2「もしあなたが、身近なところで車いすの車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら、すぐに助ける」、質問9「もしあなたがこの文章の登場人物であったら、筆者と同じように車いすの少年をすぐに助ける」、質問10「もしあなたが、身近なところで車いすの車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら、人任せにせず自分が助ける」、質問16「もしあなたが車いす使用者で、車いすの車輪が溝にはまってしまったら、周囲の人にすぐ助けてほしい」の4項目で構成されていた。この因子は、積極的に援助行動に関する項目である。このことから第1因子を「積極的援助」と名付けた。

第2因子は、質問3「この文章の筆者は、手助けする前に車いすの少年の意思を確認するべきだった」、質問7「もしあなたが、身近なところで車いすの車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら、手助けする前に車いす使用者の意思を確認する」、質問14「もしあなたが車いす使用者で、車いすの車輪が溝にはまってしまったら、手助けする前に意思を確認してほしい」の3項目であった。この因子は、援助行動の際に相手に対し意思確認をするかを問う項目で構成されていた。このことから第2因子を「意思確認」と名付けた。

第3因子は、質問4「もしあなたが、身近なところで車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら、手助けする前に車いす使用者が他者の迷惑になっているかどうか判断する」、質問8「この文章の筆者は、車いすの少年が車いすの車輪を側

溝に落としてしまい他者の迷惑になっているかを手助けする前に判断するべきだった」、質問12「もしあなたが車いす使用者で、車いすの車輪が溝にはまってしまったら、手助けする前に危険な状況かどうか判断してほしい」、質問15「もしあなたが、身近なところで車いすの車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら、手助けする前に車いす使用者が危険な状況にあるか判断する」、の4項目であった。この因子は、援助行動の際の周囲の状況を判断するかを問う項目で構成されていた。このことから第3因子を「状況判断」と名付けた。

Ⅳ. 考察

A大学に通う学生の道徳教材「車いすの少年」に対する意識に関する調査により「積極的援助」、「意思確認」、「状況判断」に関する3つの因子が抽出された。

「積極的援助」は、自分が援助する側の立場であった場合と自分が援助される側の立場であった場合の2つの立場から、積極的な援助行動に対して肯定している質問項目で構成されていた。積極的な援助行動には「すぐに手助けしようとする」という、援助行動までの早さに関する側面と、「人任せにせず自分が手助けする」という、援助行動に対する主体性に関する側面の2側面が含まれていた。この質問項目は、自由記述式調査用紙で得た「(車いすの車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら)迷わず助ける」、「(自分が車いす使用者で、車いすの車輪が溝にはまってしまったら)周囲に助けを求める」などの回答から作成した。困った状況に陥った時に他者から手助けしてもらうことに対して肯定的に捉えていることが、この因子を構成したと考える。

「意思確認」は、自分が援助する側の立場であった場合と自分が援助される側の立場であった場合の2つの立場で、援助行動の際に援助の受け手に対して意思確認をすることが必要であるとする質問項目と、道徳教材「車いすの少年」において、筆者は手助けしようとする前に援助の受け手である車いすの少年の意思を確認することが必要であったとする質問項目で構成されていた。この質問項目は、自由記述式調査用紙で得た「(車いすの車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら)助けてほしいか、そうでないかという相手の意思を確かめてから助けるか、見守るかを決める」、「(自分が車いす使用者で、車いすの車輪が溝にはまってしまったら)

Table1 道徳副読本「車いすの少年」についての意識

質問項目	因子1	因子2	因子3
第1因子：積極的援助			
・もしあなながこの文章の登場人物であったら、筆者と同じように車いすの少年をすぐ助ける。	. 918	. 035	-. 051
・もしあななが、身近なところで車いすの車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら、人任せにせず自分が助ける。	. 773	. 146	. 053
・もしあななが、身近なところで車いすの車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら、すぐ助ける。	. 770	-. 010	. 014
・もしあななが車いす使用者で、車いすの車輪が溝にはまってしまったら、周囲の人にすぐ助けてほしい。	. 518	-. 251	. 200
第2因子：意思確認			
・この文章の筆者は、手助けする前に車いすの少年の意思を確認するべきだった。	-. 031	. 760	-. 108
・もしあななが、身近なところで車いすの車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら、手助けする前に車いす使用者の意思を確認する。	-. 064	. 627	. 049
・もしあななが車いす使用者で、車いすの車輪が溝にはまってしまったら、手助けする前に意思を確認してほしい。	. 008	. 501	. 197
第3因子：状況判断			
・この文章の筆者は、車いすの少年が車いすの車輪を溝に落としてしまい他者の迷惑になっているかを手助けする前に確認するべきだった。	. 114	-. 116	. 549
・もしあななが、身近なところで車いすの車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら、手助けする前に車いす使用者が他者の迷惑になっているか確認する。	-. 141	. 049	. 530
・もしあななが車いす使用者で、車いすの車輪が溝にはまってしまったら、他者の迷惑になっているか気になる。	. 115	. 123	. 473
・もしあななが、身近なところで車いすの車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら、手助けする前に車いす使用者が危険な状況にあるか判断する。	-. 026	. 297	. 435

因子抽出法：最尤法 回転方法：kaiserの正規化を伴うプロマックス回転

Table 2 因子間相関

因子	積極的援助	意思確認	状況判断
第1因子：積極的援助	1.000	-.004	.021
第2因子：意思確認	-.004	1.000	-.602
第3因子：状況判断	.021	.602	1.000

声を掛けられたら助けてもらう」, 「(物語の最初の筆者の行動について) 少年の意思確認をせず車を動かそうとした点は, 他人の意思を尊重する態度に欠ける」などの回答から作成した。援助行動の受け手に対して, 手助けが必要かどうかの意思確認することが必要だという考えが, この因子を構成したと考える。

「状況判断」は, 自分が援助する側の立場であった場合と自分が援助される側の立場であった場合の2つの立場で, 他者の迷惑になっていたり危険な状況に陥っていたりするなどその場の状況を手助けする前に確認することを必要とする質問項目と, 道徳教材「車いすの少年」において筆者は, 手助けしようとする前に援助の受け手である車いすの少年が他者の迷惑になっているかどうかを判断することが必要であったとする質問項目で構成されていた。この質問項目は, 自由記述式調査用紙で得た「(車いすの車輪が溝にはまってしまった車いす使用者に出会ったら) 車いす使用者に危険が迫っている場合は手助けをする。」「(自分が車いす使用者で, 車いすの車輪が溝にはまってしまったら) 危険が伴ったり他の人の迷惑になったりしそうな場合は手助けをお願いします。」などの回答から作成した。援助行動を行う前に, 援助の受け手が手助けを必要としているかどうか周囲の状況から判断するということに対する意識により構成されたと考える。

水野(2008)による大学生に対する調査では「車いすの車輪が溝にはまった少年を見守る行動が適切である」と捉える大学生が大多数であったが, 今回の調査では積極的な援助行動に対して肯定的である意識や, 援助の受け手に対する意思確認の必要性についての意識, 援助の受け手が置かれている周囲の状況に関する意識など, 多様な意識が存在することが明らかとなった。これに関して, 近年の障害者に関する法整備の進展により障害者へのステレオタイ

プ的な見方が変わりつつあることの現れではないかと考えられる。

最近では, 非障害者などが感動するための対象として障害者を扱うような行為に対して, 障害のある当事者たちが異議を唱えるテレビ番組が制作され話題を呼んでいる。Young(2012)は, ウェブマガジン「Ramp Up」の中で, 「障害に負けず努力する障害者」像をメディアが取り上げることを「感動ポルノ(Inspiration porn)」と表現し, 批判している。また2016年8月には民放放送局で放送されていた「24時間テレビ」の裏番組で, NHK Eテレ『バリバラ～障害者情報バラエティー～』が, 「検証! 『障害者×感動』の方程式」のテーマで「感動ポルノ」に一石を投じている。今後, こうした声は, 障害理解教育のあり方, 障害者と非障害者の関係にも大きく影響するであろう。

道徳教科書においても, 頑張る障害者を「援助する」あるいは, 頑張っている障害者を「見守る」と言った単純な構造の中で, 誤った道徳観を植え付けてしまうことは避けなければならない。多様な考え方の中で, どのようなあり方が望まれるのか, 様々な観点から活発に議論していくことこそがこれからは必要なのではないだろうか。

引用文献

- 水野智美(2008) 道徳資料「車いすの少年」に対する車いす使用者と大学生の評価, 障害理解研究(10), 1-6.
- 水野智美(2005a) 障害理解教育の現状, 徳田克己・水野智美編著「障害理解-心のバリアフリーの理論と実際-」, 誠信書房, 57-62
- 水野智美(2005b) 道徳における障害の扱われ方, 徳田克己・水野智美編著「障害理解-心のバリアフリーの理論と実際-」, 誠信書房, 99-109.
- 水野 智美・富樫 美奈子・石上 智美・西館 有沙・

徳田 克己(2004)「道徳副読本における障害の扱われ方Ⅱ-道徳副読本における障害に関する内容の分析を中心に-」.日本教育心理学会第46回総会発表論文集, pp221.

文部科学省(2012)「道徳教育実施状況調査結果の概要」.

正進社「車いすの少年」, 中学生の道徳・道しるべ2教師用指導書, 144-147.

富樫美奈子・水野智美・石上智美・西舘有沙・徳田克己(2004)「道徳副読本における障害の扱われ方Ⅰ-道徳副読本における掲載率を中心に-」.日本教育心理学会第46回総会発表論文集, pp220.

徳田克己・水野智美(2007)道徳教材「車いすの少年」に対する車いす使用者の評価, 日本教育心理学会総会発表論文集(49), 300.

高井哲郎「車いすの少年」.学校学級講話資料12か月.文教書院.

Young, S (2012) "We're not here for your inspiration". The Drum. Abc.net.au.

<http://www.abc.net.au/news/2012-07-03/young-inspiration-porn/4107006>. 2017/06/05 閲覧.